

『ヒューマニスティック英語教育研究会紀要』

(Journal of Humanistic English Education in Japan)

書式マニュアル(2026 年 7 月改訂版)

1. 原稿レイアウト: 下記のレイアウトを用いる。

使用ワープロ	Microsoft Word、ファイルの拡張子は .docx
用紙サイズ	A4 (幅 210mm, 高さ 297 mm)
余白	上下左右ともに 20mm
文字数・行数	1 行の文字数は全角 45 字、1 ページの行数は 42 行
ページ番号	各ページの下段中央に仮のページ番号を振る

2. 分量: 自由投稿原稿は本文のほか、資料、参考文献などをすべて含めて 20 ページを上限とする。

3. 冒頭ページの書式:

最初のページの第 1 (及び第 2) 行目に論文の題名を記し、第 3 行目は 空白行 (以降、空白行はすべて 10.5pt) として、第 4 (及び第 5) 行目には右詰めで投稿者氏名を書く。第 6 (あるいは第 7) 行目は空白行として、第 7 (あるいは第 8) 行目以降に本文を書き始めること。また、新たにセクションを始める場合には、その前に 1 行空けること。

4. フォント及びその大きさ: 和文フォントは MS P 明朝, 英文フォントは Times New Roman を基本として, MS ゴシックの使用を認める。なお, Times New Roman にない特殊文字を使用する場合には, その旨を編集委員会に伝えること。英文フォントの太字体, 斜字体の使用は認めるが, 題名, 副題を除いて, 和文フォントの太字体, 斜字体の使用は認めない。文字の大きさについては以下に従うこと。

- 4.1 題名, 副題 題名は, 16pt の太字, 中央揃えとすること。副題がある場合には, コロン(:)を挿入してから, 改行し, 副題を 14pt の太字, 中央揃えで示すこと。

- 4.2 氏名 氏名は MS P 明朝, Times New Roman とし, 両方とも 10.5pt の中央揃え。「名字 名前 (MYOJI, Namae)」のように記すこと。また, 執筆者の所属先を入れる場合は, 論文の一番最後にカッコに入れて表示する。

たとえば:

(〇〇学園△△小学校教諭), (〇〇県△△私立◇◇中学校教諭), (〇〇県立△△高校教諭),
(〇〇大学△△学部教授), (〇〇大学△△学部非常勤講師), (Cosmos 英語学習教室自営) 等とする。
ただし、どこまで詳細に表示するかは本人の意向に任せる。

4.3 本文 10.5pt, 両端寄せとし、英語等の単語は自動区切り使用すること。和文の場合は、段落最初は全角
1 文字分下げする。英文の場合は、3 文字分インデントする。本文中の注番号は上付文字とする。句読
点については、和文では「,」「.」を、英文では「,」「.」を用いること。

4.3.1 セクション題: 日本語の場合は、MS ゴシック (太字にしない) を、英語等の場合にスタイルシート
は Times New Roman の太字体を用い、12pt の左揃えで示すこと。セクション題の上に 10.5pt の空白
行を入れる。セクション題の下には空白行を入れない。

なお、本文中に項目を列挙する際に、1, 2, 3 など算用数字を用いると、セクション番号と区別がまざら
わしいので、別の表示とすること。たとえば(1)、(2)、(3)や i)、ii)、iii) など。

4.3.2 サブセクション題: 日本語の場合は、MS ゴシック (太字にしない) を、英語等の場合には Times
New Roman の太字体を用い、10.5pt の左揃えで示すこと。真上にセクション題がある場合には、サブ
セクション題の上に空白行を入れず、真上にセクション題がない場合には、サブセクション題の上に
10.5pt の空白行を入れること。サブセクション題の下には空白行を入れない。なお、サブサブセクシ
ョンがある場合も、サブセクションの扱いと同様とする。

4.3.3 数字及び単位の表記: 数字は、固有名詞を除いて、半角のアラビア数字に統一し、漢数字は使わ
ないこと(例: 1 つ, 第 2 に, 34 人)。

4.3.4 引用: 間接引用については、その末尾に()の中に文献の著者と発行年を入れて示すこと。直接引
用については、その部分を「」で囲み、直後に()を用いて引用ページを添えること。引用部分が 4
行を超える場合は、「」を用いず、別行とすること。引用を導入する文に、著者名及び出版年を記して
いない場合は、引用の末尾に著者名、出版年、引用ページを()を用いて添えること。英語論文での引
用の仕方は原則 APA 第 7 版を参照すること。

4.3.5 例文: 上下に 10.5pt の空白行を入れる。例文は丸括弧の中に通し番号を付け、和文の場合、全
角 1 文字分、英文の場合、半角 3 字のインデントを入れて書く。執筆言語と異なる言語の例文には、
必要に応じて単語(あるいは形態素)ごとにグロスあるいは全文の訳を付けること。ただし、英文はその
限りでない。

4.3.6 図、及び表: 上下に 10.5pt の空白行を入れ、本文に組み入れること。表は表の上部に「表 1」の

ように例文や図とは別に通し番号を付け、全角スペースを 1 つ入れて、表の題名を示すこと（中央揃え）。図の場合は、図の下部に、「図 1」のように、例文や表とは別に通し番号を付け、全角スペースを 1 つ入れて、図の題名を示すこと（中央揃え）。フォントと文字の大きさは、和文の場合、MS ゴシック（太字にしない）10.5pt を、英語等の場合には Times New Roman の太字体 10.5pt を用いること。図表の注が必要な場合には、9pt で図表の直下に続けること。

4.3.7 他の文献から図表やグラフをコピー＆ペーストする場合:

紀要印刷の鮮明さを確保するため、コピー＆ペーストする部分の全ての文字サイズを 9 ポイント以上とすること。その文字サイズが確保できない場合には、コピー＆ペーストを用いず、ワープロで打ち直して記載すること。

4.3.8 生徒の顔が写り、人物が識別できるような写真の挿入は控えること。また生徒の作品や成果物は生徒に著作権が有るので、掲載の許諾を取ったものだけを掲載すること。

4.4 脚注 9pt の両端揃えとし、各脚注の 1 行目は 1 文字分下げること。

4.5 引用文献「【引用文献】」は中央揃え、10.5pt, MS ゴシック（太字にしない）。改行の後、引用文献自体を続けること。参考文献自体は、10pt, MS P ゴシックで示し、和洋の文献を区別せず、著者の姓のアルファベット順にスタイルシート並べること。英文の場合は、References と中央揃え、10.5pt, Times New Roman, 太字で記入し、改行した後で、その続きに参考文献自体を 10pt, Times New Roman, 両端揃えで示すこと。なお、日英語ともに、各文献の情報が 2 行にまたがる場合には、2行目以降を全角2文字分下げること。英語での引用文献の書き方は原則 APA 第 7 版を参照すること。

APA式用についてのガイドは、立命館大学のガイドが参考になります。[Microsoft Word – APA_jaFinal0924.doc \(ritsumei.ac.jp\)](https://www.ritsumei.ac.jp/~lib/apa/)

Table 1

Six Steps of a Collaborative Passage Development Task (Reproduced from Shibata, 2026, pp. 109–110)

Steps	Step Title	Description
Step 1	Brainstorming	● (Re)think about the assigned reading topic ● Generate some ideas and keywords to develop the quality of an assigned reading passage
Step 2	Discussion	● Share ideas with partners ● Discuss drawbacks of the reading passage with partners
Step 3	Commenting on the Assigned Passage	● Re(read) the passage ● Write down some ideas and suggestions to develop it
Step 4	Individual Passage Development	● Develop the assigned reading passage individually based on their content knowledge and experiences ● Rewrite sentences in their own words (if necessary) ● Check cohesion and coherency whilst revising the passage
Step 5	Commenting on the Developed Passage	● Read partners' reading passages ● Provide some comments and suggestions for partners
Step 6	Revision	● Revise the passage based on comments and suggestions received from partners ● Check cohesion and coherency in the text

HLT の言語指導プログラムの根底となる理論は、(1)全人格的存在の尊重、(2)個人の潜在的可能性の発揮、

○○○○○
○○○○。

[illegible][illegible]

-
- | | | | | |
|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|-------------------|
| ユニケーション
レベル1のコミ | ユニケーション
レベル2のコミ | ユニケーション
レベル3のコミ | ユニケーション
レベル4のコミ | 人間的な価値のある意味, の授受 |
| | | | | 伝達ニーズのある意味, の授受 |
| | | | | 場面や文脈に適合した意味, の授受 |
| | | | | 記号的な意味, の授受 |

6

A Conceptual Model of the Relationship Between GenAI-Writerism and Possible Factors (Reproduced from Shibata, 2026, p.15)



HLT 授業の Method は、下記の特徴を持つものと考えられる。

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

Appel, J. (1989). 'Humanistic Approaches in the Secondary School: How far can we go?' *ELT Journal*, 43(4). 261–267. <https://doi.org/10.1093/elt/43.4.261> (Times New Roman 10.5)

Cohen, L., Manion, L., & Morrison, K. (2018). *Research methods in education* (8th ed.). Routledge. <https://doi.org/10.4324/9781315456539>

デカーヴァロー・ロイ・J. (1994)『ヒューマニスティック心理学入門』. 伊藤博(訳). 新水社.

石井博之. (2021). 「日々の授業で生徒の人間形成を促す英語活動の試み」. 『ヒューマニスティック英語教育研究会紀要第 1 号』. ヒューマニスティック英語教育研究会. (pp.140–157)

Koizumi, R., Agawa, T., Asano, K., & In'nami, Y. (2022). Skill profiles of Japanese English learners and reasons for uneven patterns. *Language Testing in Asia*, 12, Article Number 53. <https://doi.org/10.1186/s40468-022-00203-3>

Lin, A. M. Y., & Chen, Q. (2025). Towards ethical and responsible generative AI use in English medium education classrooms across Asia: A posthumanist perspective. In F. V. Lim & J. Pun (Eds.), *Designing learning with multimodality in English medium of education (EME) classrooms across Asia* (pp. 235–258). Bloomsbury. <https://doi.org/10.5040/9781350358294.ch-010>

三浦 孝. (2006B). 「Relating Soul to Soul—人間関係の育てあいとしての英語教育を今こそ—」犬塚・三浦(編著)『英語コミュニケーション活動と人間形成』. 成美堂.

Shibata, N. (2026a). Generative artificial intelligence writerism: Factors in overestimation of generative artificial intelligence output. *Hyumanisutikku eigo kyoiku kenkyukai kiyo [Journal of Humanistic Language Teaching in Japan]*, 6, 6–21.

Shibata, N. (2026b). The effects of collaborative passage development activities on commenting and writing revision skills. In A. E. Dawes & K. Jurns (Eds.), *Cultivating confidence in L2 writing: Communicative and peer review practices* (pp. 105–123). Candlin & Mynard. <https://doi.org/10.47908/44/6>

8